

千刈狸の呟き

たとえば待ち時間、大病院の外来患者さんからよく聞く、2時間も待った。先生は診察もせず、薬だけ処方したと。面白くなかったと。患者さんの正直な気持ちであろう。外来医が何時間もそうとうがんばっているのだが。

「被害者と加害者の関係は1000年たっても変わらない」とする言葉。私はこの問題について解決策がわからないので毎回の指摘に疲れる（イライラ）。だが、私は、この件に関し先日曾野綾子氏の新聞記事を読みとても納得したので、勝手ながら書かせて頂く。

ここから引用

謝罪ということは、直接の被害を受けた人と、与えた人とが現在そこに当事者としている場合しかなしえない。もし当事者でない者が謝ることが出来るなら、私たちは仮に殺人を犯しても、容易に代理人を立てて、謝罪させておけば済むようになるから。

70年前に起きたことを今でも言い立てる人がいたら、そういう性格の人とは付き合いたくないと思う。70年前自分の知らない曾祖父が行った悪事を、今普通の市民として生きている私に責められても、私としては謝りようがない。戦後の日本人は、国中焦土になった中から復興し、誠実に働いて、人道にもとる行為もせず生きてきた。それが過去の戦争に対する反省であり、償いであろう。ユダヤ人の謝罪に関する認識の話、あるドイツ人が一人のユダヤ人に「戦争中ナチスに加わった同胞の罪を赦して下さい」と言った。するとユダヤ人は「私はあなたを裁くことも赦すこともできません」と。引用ここまで。

～イライラ～

蒼 狸

儒教では、失敗した人を罰すれば、より注意するようになり、間違えなくなるだろうと考えるそうです。また騙す人と騙される人がいる場合、騙される人が悪いそうです。そういえば孫子の兵法に相手を如何に欺いて戦いに勝つか網羅的に記載されています。このように我々とは異なる儒教的立場に立てば、かの国の報道官のスピーチに納得できます。

他方西洋において、例えばスポーツマンシップとは、競技規則を守り、規則を破った場合は自身がペナルティーを履行することと定義されています。スポーツマンシップに例えば立派に振る舞うという精神論的なことは入ってきません。

儒教でも、前述のスポーツマンシップでもそこに私が考えているフェアな立場は強調されていません。正々堂々と戦うことを求めるのが日本人の精神だと思います。戦いの結果よりも、フェアな戦い方を重要視する傾向すらあります。私がこの正々堂々の意味を正しく理解してないのかもしれないかもしれませんが、これが我々日本人に固有の特性とされます。しかし対戦相手によって、我々は時には儒教的に考えたり、また時には西洋的になって結果を重視し対戦すべきかもしれません。

基本的思考パターンが異なる相手が存在すること、その相手に自分の考えを強要しないことが相手をリスペクトするというのでしょうか。双方で一緒にお互いをリスペクトが出来ないとき、人々はイライラするものと思われます。